

■トイレを分析する■

遺跡からみつかる溝や穴などのうち、それらがトイレである決め手となるものが、寄生虫卵の存在です。

寄生虫のうち回虫と鞭虫は、寄生虫に感染した人の糞便とともに卵が体外へ排出され、食べ物や水を通して再び人に経口感染します。

条虫類いわゆるサナダムシや吸虫類などは、体外に排出された卵が中間宿主と呼ばれる生き物を介して最終的に人に寄生します。

これらの寄生虫は、寄生対象である宿主を厳密に選択し、特定の寄生虫は特定の生き物の体内でのみふ化、成長、産卵などをおこなうことで知られています。

例えば、有鉤条虫は人の体内でのみ成虫となり、その卵が人体から排出された後にブタやイノシシに摂取されることでふ化し、生あるいは十分加熱されていないこれらの肉を人が食べることで、感染します。

同様に、無鉤条虫はウシを、肝吸虫はコイ科の魚を、横川吸虫はアユやシラウオを中間宿主とします。

この性質のため、寄生虫卵の検出からは、当時の人びとが感染していた寄生虫、ひいては食べていた動物や魚介類が推定できます。

また、寄生虫卵とともに検出される花粉には、イネ、アブラナ科、ネギ属、ヨモギ属など食用や薬用になったと考えられる植物がみられます。

特に今回の展示で紹介している平城京跡のトイレ関連遺構 SX-804 からは、回虫、鞭虫、有鉤条虫、無鉤条虫などの寄生虫卵やバジルの仲間花粉が検出されました。

このように、土壌の分析からは、当時食べられていたものが具体的にみえてきます。